

複式簿記の原理～「超」入門編おさらい

複式簿記は、次の式からすべてが始まります。

$$\text{資 産} - \text{負 債} = \text{純資産}$$

「いまある財産（資産）から、他からの借りもの（負債）を引いた残りが、純粋な自前の資産（純資産）」という式です。

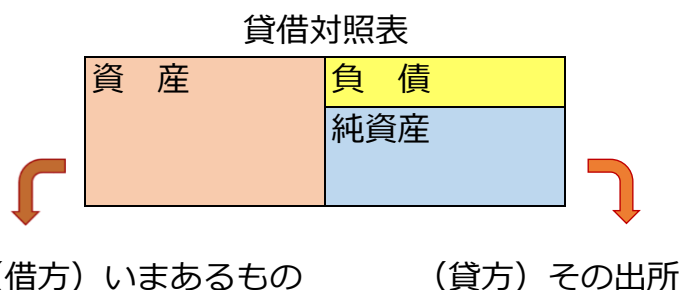
この式の「－負債」を右辺（イコールの右側）に移項すると、

$$\text{資 産} = \text{負 債} + \text{純資産}$$

この式を図に変換すると、

資 産	負 債
	純資産

この図の左半分（資産）を**借方**といい、右半分（負債、純資産）を**貸方**といいます。そして上の図は、その**借方**と**貸方**を並べて**対照**させた**表**なので「**貸借対照表**」といいます。



貸借対照表の借方（＝資産）は、いまある財産を意味し、貸方（＝負債、純資産）は、その財産の出所の内訳を意味します。

複式簿記の世界では、単式簿記と違って、お金（現金）だけでなく、お金と同じ価値のあるものは、お金と同じ財産（＝資産）としてお金と同じようにカウントします。複式簿記を学習していなくとも、「財産」といえばお金だけでなく土地や株式なども、財産に含まれるのは、ご理解いただけますよね？

それでは具体例を見てみましょう。

ある会社では、金目のものとして、現金 ¥ 5,000 のほかに、売るための商品 ¥ 2,000、会社の建物が ¥ 15,000、机などの備品が ¥ 8,000 あります。これらは全てこの会社の財産（資産）としてカウントされます。

【 資 産 】	
現 金	5,000
商 品	2,000
建 物	15,000
備 品	8,000
	<hr/>
	30,000

ただし、この財産（資産）が、すべてこの会社のものとは限りません。例えば、全財産 ¥ 30,000 のうち、実は ¥ 10,000 は借金して借りたもの（負債）だとすると、差し引き ¥ 20,000 分が、返済しなくていい純粋な自前の資産（純資産）ということになります。その内訳を資産一覧の右側に示すと、

【 資 産 】		【財源の内訳】	
現 金	5,000	}	借入金 10,000
商 品	2,000		
建 物	15,000	}	資本金 20,000
備 品	8,000		
	<hr/>		<hr/>
	30,000		30,000

これを、前ページのように資産・負債・純資産に色分けしてグルーピングすると、

貸借対照表

【 資 産 】		【 負 債 】	
現 金	5,000	借入金	10,000
商 品	2,000		
建 物	15,000	【 純資産 】	
備 品	8,000	資本金	20,000
30,000		30,000	

貸借対照表になります。

日商簿記3級では、比較的小規模な株式会社を対象とした簿記会計を対象とします。

株式会社というのは、純資産である資本金を出資してくれた出資者に対し、出資してくれた金額に応じた「株式」というものを交付します。

この「株式」というのは、株式会社の所有権（「持分」といいます）を表すもので、基本的に出資金額の割合分だけ、その株式会社の意思決定に影響力を行使できることとなります。

具体的には、その株式会社の重要な方針や取締役などを決める場である「株主総会」で、各株主は、自分の出資金額の割合で議決権が与えられます。つまり、全出資者の出資金額の過半数を占める出資者は、過半数の議決権を与えられますから、自分の意のままに、株主総会で意思決定できることとなります。

これが、株式会社のだいたいの概要です。

複式簿記の始まりの仕訳

複式簿記のスタートは、会社で事業用の資金が調達されることからです。その資金の出所は？

【例 1 - 1】

当社は、株式会社設立にあたって、株式 200 株を 1 株当たり 100 円で発行し、その全額を出資者より現金で受け取った。

仕訳の鉄則は「わかりやすい方から」。

@ ¥100/株×200 株 = ¥20,000 の現金が増えたので、借方 = 現金ですね。

では、その ¥20,000 の出所は何ですか？ 借金ですか？

ではなく、出資者が出資してくれたお金、つまり**資本金**です。

【仕訳】

(借) 現 金 20,000 (貸) 資本金 20,000

(仕訳の意味)

現金勘定の借方（左側）に ¥20,000

資本金勘定の貸方（右側）に ¥20,000

をそれぞれ記帳

【勘定記入】

現 金		資本金	
資本金 20,000			現 金 20,000

正式な総勘定元帳の勘定のフォーマットは、後で学習しますが、ここでは勘定の簡略型のフォーマットを使って記帳します。

上記のような勘定のスタイルを「T 字」勘定などといいます。

「T」の上にある表題が、その勘定の科目名です。「T」字の左側が借方、右側が貸方です。仕訳した側と同じ側に勘定記入します。このとき勘違いしないよう注意が必要なのは、あくまでT字の上が勘定科目名であり、金額の左側に書かれる科目名は、仕訳のときの相手科目だということです。

それではこの【例1－1】で一番最初に行われた取引について記帳された勘定（前掲の現金勘定と資本金勘定）を合体させて、一番最初の貸借対照表をつくってみましょう。



貸借対照表	
(資産)	(負債) 0
現金 20,000	(純資産)
	資本金 20,000

この貸借対照表の意味するところは、

（借方）いまある現金 ¥20,000 は借りもの。どこから借りたかというと、

（貸方）出資者（株主）が出資してくれたもの（資本金）

という意味合いになります。

<p>【借方】</p> <p>資 産</p>  <p>=出資者から借りたもの</p>	<p>【貸方】</p> <p>出資者（資本金）</p>  <p>「ワシの出資した2万円 どれだけ増えてくるかな」</p>
---	---

資金が足りなくなったら？～増資

事業規模の拡大などにより、事業資金がもっとたくさん必要になったら。

一番最初の出資金集めだけでなく、株式会社がスタートしてから、随時新しい出資者（株主）を募って、追加の出資を受けることもできます。これを「増資」といいます。

また、増資のために新たに株式を発行することを「新株発行」といいます。

ただ、言葉づかいは変わりますが、会計処理（仕訳）のやり方は、一番最初の資本金のときと同じです。

【例 1 - 2】

【例 1 - 1】のあと、当社は、増資にあたって、新株 100 株を 1 株当たり 100 円で発行し、その全額を出資者より現金で受け取った。

【仕訳】

（借）現 金 10,000 （貸）資本金 10,000

【例 1 - 1】の続きで、現金勘定と資本金勘定、そしてそれらを合体させた貸借対照表をつくると、

【勘定記入】

現 金	
資本金 20,000	
資本金 10,000	
資本金	
	現 金 20,000
	現 金 10,000

【貸借対照表】

貸借対照表	
（資産）	（負債） 0
現 金 30,000	（純資産）
	資本金 30,000

資産（現金）と純資産（資本金）どちらも 30,000 円ずつになります。まだ負債はありませんね。

資金が足りなくなったら？～借入金

純資産・資本金とは関係ありませんが、事業資金の調達方法として、出資をしてもらう以外に、銀行などから借り入れるという方法もあります。

【例 1 - 3】

【例 1 - 2】のあと、当社は第百銀行から ¥ 15,000 を借り入れ、現金で受け取った。

【仕訳】

(借) 現 金 15,000 (貸) 借入金 15,000

出資金だろうと借金だろうと、手元に現金という資産が増えれば、借方＝現金です。貸方が、今回は資本金ではなく借入金にかわりました。

現 金		貸借対照表		借入金	
資本金 20,000	→	(資産)	(負債)		現 金 15,000
資本金 10,000		現 金 45,000	現 金 15,000		
借入金 15,000			(純資産)		
			資本金 30,000		資本金
					現 金 20,000
					現 金 10,000

ここで貸借対照表の意味は、

(借方) いまある現金という財産は ¥ 45,000 ある

(貸方) その出所、つまり誰が貸してくれたかその内訳は、

うち ¥ 15,000 分が銀行 (からの借入金)

残り ¥ 30,000 分が株主 (が出資してくれた資本金)

純資産については、一旦ここまで。

純資産の続きは、1 年分一通り学習し、決算を終えたところで、再び学習します。